

中学校における生徒の社会性を育てる異学年交流の在り方

- 「日本のピア・サポート・プログラム」の活用を通して -

教育相談課 長期研修員 小畑 多佳子

1 主題設定の理由と研究の目的

平成13年4月文部科学省「心と行動のネットワーク」は、児童生徒の問題行動の背景や要因に、社会性や対人関係能力が十分身に付いていない状況があることを指摘している。また、社会性がはぐくまれにくい社会全体の状況として、地域社会における人間関係の希薄化が進んでいること、少子化に伴い、かつてのように多数の子供が異年齢集団を形成して様々な経験をするという機会が減少していることを挙げている。子供の成長に、こうした社会状況が大きな影響を及ぼすのであれば、コミュニケーション能力や自己表現能力の低下、対人関係がうまく結べない、自己中心的な価値観、規範意識の低下などの社会性(注1)の未発達の問題は、すべての子供にかかわる問題と言える。

ところで、この社会性の育成については、国立教育政策研究所生徒指導センターが「『児童生徒の社会性を育むための生徒指導プログラムの開発』を目的とした研究」において、「学級や学年をこえた『かかわり合い』なしに、学級担任だけで『社会性の基礎』(人とかかわりたいと思う気持ち)を育てるのは困難」で、「意図的、計画的な『異年齢交流』の実施が、その育成につながる」と報告している。

在籍校では、社会性を身に付けた生徒の育成を目指し、これまでも、人間関係づくりのための構成的グループエンカウンターなどに、学級や学年単位で取り組んできた。また、特定の行事や一部の学年を超えた学級担任同士のつながりの中での異学年交流の試みを、ここ数年続けている。しかしながら、対人関係のストレスから様々な問題行動を示す子供たちの存在は依然、学校全体の課題であり、より有効な手立ての必要性を多くの教師が感じている。そこで、これまでの在籍校での取組の上に、「日本のピア・サポート・プログラム」(注2)の考え方を生かし、意図的・計画的な異学年交流を実施すれば、一部の生徒ではなくすべての年長生徒に「自己有用感」を獲得させ、社会性の向上を図ることができると考え、本研究を実施した。

2 研究仮説

3年間を見通し、学校全体で異学年交流に取り組めば、次のような生徒が育成される。

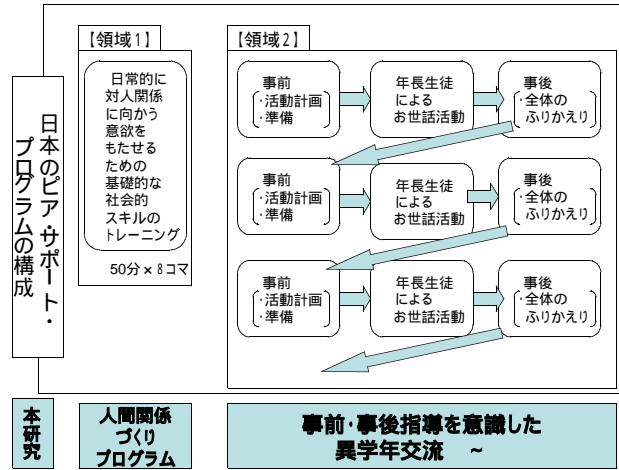
- ・下級生の役に立つことで「自己有用感」を獲得し、社会性を向上させる上級生
- ・上級生とともに様々な経験をし、上級生から文化的な刺激を受けることで、「モデル＝理想の上級生像」を獲得し、これからの自分の姿に見通しをもつ下級生

3 研究の方法

本研究では、資料1に示すような「日本のピア・サポート・プログラム」の考え方を活用した。

【資料1】「日本のピア・サポート・プログラム」の考え方

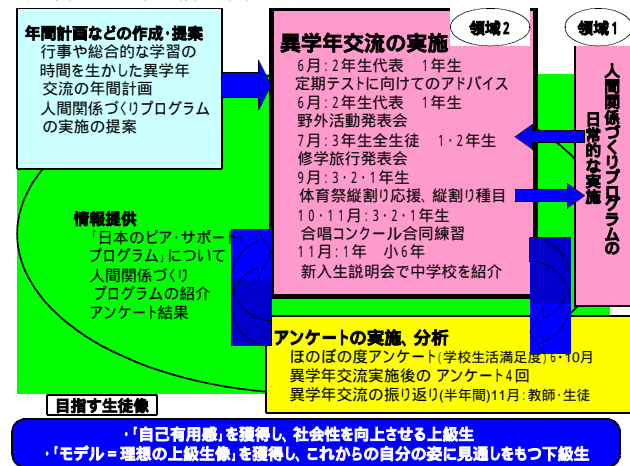
学級を超えた学校づくり、地域づくり等の「広がり」の視点と、発達の見通しのもとでの予防教育的(注3)な視点から、子供の対人関係の未熟・未発達の問題を解消しようとする取組。異年齢交流により、同質性の集団(学級)の中だけでは形成できない多様な人間関係を形成し、年長生徒が年少生徒を「お世話する活動(他人の役に立つ体験)」を行うことで、お世話する側の子供(年長生徒)全員が「自己有用感」(注4)を獲得する。それにより子供は、他者とのかわりを好ましく思ったり、社会的役割を果たそうと考えたりするようになり、社会性の向上を図ることができると考える。なお、「日本のピア・サポート・プログラム」では、異年齢交流の充実を図るために、日常的に対人関係に向かう意欲をもたせるための基礎的な社会的スキルのトレーニングを行う必要があるとしており、このトレーニングを「領域1」と呼ぶ。



注) 滝 充編著『新版 ピア・サポートではじめる学校づくり 中学校編』, 金子書房, 2004年, 29ページを基に筆者が作成。図中本研究の「異学年交流 ~」の詳細と研究の全体像は、【資料2】研究構想図を参照。

研究対象は、在籍校であるA中学校(1年生193人、2年生228人、3年生217人、教師34人)とする。「日本のピア・サポート・プログラム」を完全に実施することは難しいため、領域2の「お世話活動」、すなわち異学年交流に重点を置いた研究とした。在籍校では、これまでも異学年交流に取り組んできたが、「日本のピア・サポート・プログラム」の考え方を取り入れた本年度は、以下の点が従来とは異なる。 行事や総合的な学習

【資料2】研究構想図



注) 人間関係づくりプログラムが「日本のピア・サポート・プログラム」領域1に、異学年交流が領域2に相当する。

の時間など教育課程に位置付けられた教育活動を生かして、学校としての異学年交流計画を作成し、全校体制で取り組む 教師は交流の事前・事後指導の充実を図る 毎回の異学年交流の成果と課題をアンケートから検証する 異学年交流の継続が生徒の学校生活全般に与える影響についても考察する。なお、領域1については、「人間関係づくりプログラム」と名付け、4(2)イに後述するような方法で取り組んだ(資料2)。

- (1) 行事や総合的な学習の時間を生かした異学年交流年間計画の作成(5月)
- (2) 異学年交流(領域2)・人間関係づくりプログラム(領域1)の実施と成果の検証
 - ア 年間計画に基づく異学年交流(領域2)の実施(5~11月)
 - イ 人間関係づくりプログラム(領域1)の日常的な実施
 - ウ 異学年交流の継続による生徒の変化についての調査(11月)
 - エ 教師の異学年交流に対する意識の変化についての調査(7月・11月)
- (3) 「ほのぼの度アンケート」に見る生徒の社会性の発達についての考察(6月・10月)

4 研究内容及び考察

- (1) 行事や総合的な学習の時間を生かした異学年交流年間計画の作成

上級生が「自己有用感」を獲得できるように、上級生全員に活躍の場がある計画を立案した。中学校生活では常に下級生になってしまう1年生も、人の役に立つ経験ができるように、新入生説明会で小学生に対して、中学校生活について紹介する活動を計画した(資料3)。

【資料3】異学年交流年間計画

	3年生	2年生	1年生
4月			
5月	修学旅行	野外活動	
6月	修学旅行発表会(学級)	定期テストのアドバイス2年 1年	定期テスト
7月	修学旅行発表会3年全員	野外活動発表会2年 1年	
9月	体育祭縦割り種目・応援	体育祭(全校)	
10月	高校ミニ体験	職業体験	
11月	合唱コンクール 合同練習	合唱コンクール(全校)	中学校 新入生説明会 生活の紹介 小6
12月	高校ミニ体験発表会3年 2年	職業体験発表会2年 1年	
3学期	修学旅行アドバイザー3年 2年	進路アドバイザー3年 2年	修学旅行

- (2) 異学年交流(領域2)・人間関係づくりプログラム(領域1)の実施と成果の検証

ア 年間計画に基づく異学年交流(領域2)の実施

上級生が自信をもって異学年交流に臨むため、また、異学年交流の際の説明内容や資料をよりよいものとするため、事前に学級や学年で相互交流を行った。異学年交流後にはアンケートを実施し、交流の成果、課題や改善点を在籍校の教師に発信した。

- (ア) 定期テストに向けてのアドバイス(5月)2年生代表生徒 1年生

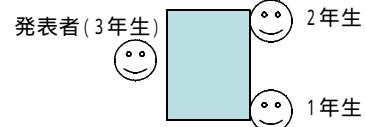
初めて定期テストを経験する1年生に、2年生が自分の経験を生かし、学習方法などをアドバイスした。1年生は「さすが2年生、良い例と悪い例を出して説明してくれて分かりやすかった。質問も何回もすることができたし、メモもしっかり取れた。学習計画表を作るときに生かしたい。」と感謝し、優れた説明の仕方についても学んでいた。活動に参加した2年生が、活動への満足感や「自己有用感」を獲得できるように、学級担任が1年生の感想を伝え、活躍を賞揚した。

6月の野外活動発表会でも、代表生徒が野外活動について1年生の教室で発表し、学級担任が1年生の感想を伝えたり、活躍を賞揚したりする形式で交流を行った。

- (イ) 修学旅行発表会(7月)3年生全生徒 1・2年生

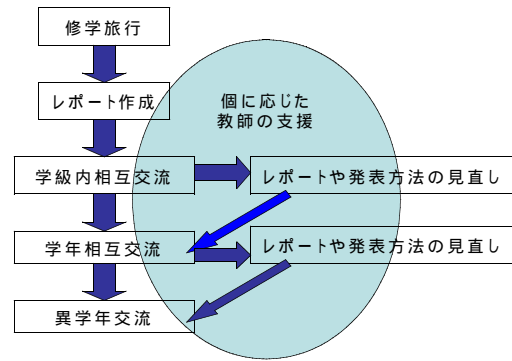
3年生一人一人が「活躍した」と実感できるように、3年生一人の発表を1・2年生各一人が聞く形式をとった(資料4)。学級や学年で相互交流を行い、レポートの内容や発表の仕方について、同級生や教師がアドバイスするなど、事前指導の充実を図り、個対個の交流に3年生が自信をもって臨めるようにした(資料5)。その結果、3年生の82.4%の生徒が「下級生の役に立てた実感」を得、90.1%の生徒が「今後もだれかの役に立ちたい」と答えた(資料6)。3年生は、下級生が自分の発表を一生懸命に聞いたり質問したりする姿や感想カードに書かれた感謝の言葉から「役立

【資料4】修学旅行発表会の発表形式



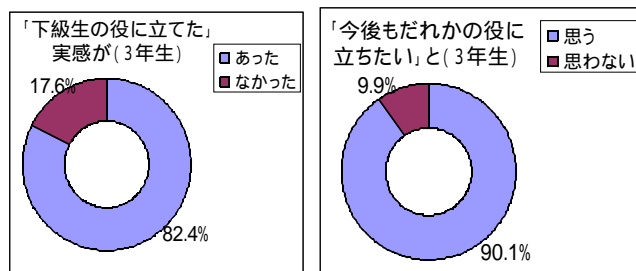
てた実感」を味わっており、自分の経験が他人の役に立つ喜びや人に何かを伝える楽しさも感じていた。また、「下級生の役に立てた実感」がもてなかった35人中6人が、「今度こそ下級生の役に立ちたい」と答えた。この活動は、他者とのかわりを通じた「自己有用感」の獲得に有意義であったと考える。

【資料5】修学旅行発表会までの指導(3年)



3年生との交流を通して、1年生の93.3% 2年生の90.6%の生徒が「理想の上級生像」を獲得したと答えた。「なりたい上級生」の姿として、「大きな声で堂々と発表できる」「表情豊かに話せる」「分かりやすい説明ができる」「下

【資料6】修学旅行発表会後のアンケート



級生にも公平に接する」「レポートをきちんとまとめられる」「自分の考えが言える」などが挙がった。一方「なりたくない上級生」の姿としては、「自分の考えや意見が言えない」「声が小さく、何を言っているのか聞き取れない」「レポートの提示の仕方が分かりにくい」などであった。

アンケート結果を基に、3年生の頑張りや1・2年生の優れた気付きを賞揚すること、学級担任の事前・事後指導により異学年交流の取組や成果に差が出ること、異学年交流を一層充実させるために、「聞き方」「伝え方」のスキル学習を行う必要があることを在籍校の教師に伝えた。

(ウ) 体育祭(9月)全学年

「縦割り種目」を設け、応援も縦割り集団で行った。3年生のリードの下で、出場種目の決定や種目練習、応援練習に3学年で協力して取り組む姿が見られた。3学年とも90%以上の生徒が「縦割り種目の実施がよかった」と答え、1・3年生では95%の生徒が、来年度以降の実施を希望した(資料7)。

【資料7】体育祭後のアンケート
縦割り種目をやったことがためになった、よかった

	1年計	2年計	3年計
よかった	97.3%	91.6%	95.0%
よくなかった	1.6%	7.5%	5.0%
無回答	1.1%	0.9%	0.0%

これからも縦割り種目をやりたいと思う

	1年計	2年計	3年計
思う	96.7%	85.1%	95.0%
思わない	3.3%	14.9%	5.0%

注) 3年生は「縦割り種目を残して欲しいと思う」

特に1年生は、上級生になったときの姿をイメージし、「1年生の役に立ちたい」「熱意を伝えたい」との思いをもった(資料7)。これに対し、2年生で来年度の実施を希望する生徒は85.1%であった。希望しない主な理由は、「3年生として1・2年生をリードできるか心配」という不安と、「のびのびできなかった」「何をしたいのか分からなかった」など、3年生主体の活動への不満

だった。年長生徒の成長に焦点を当てた異学年交流の在り方について、考えさせられるアンケート結果であった。

(I) 合唱コンクール合同練習(10・11月) 全学年学年を超えた2または3の学級で、相互に合唱を発表し、優れた点や改善した方がいい点を指摘し合った。本年度で7年目になる活動であり、2・3年生は昨年までの経験から、交流の価値を実感している。そのため意欲的に取り組み、1年生97.8% 2年生98.6% 3年生95.5%が「他学年との交流はよかった」と答える満足度の高い交流となった。

1年生が上級生をモデルとしてこれからの自分に見通しをもったことは、これまでの交流と同様であったが、2・3年生には、これまでと異なる表れが見られた。3年生は他学年との交流がよかった理由として「自己有用感」の獲得だけでなく、

下級生からの刺激が自分たちの取組を振り返ることにつながったことや下級生からも学ぶことがあることを回答した。2年生は「上級生としての意識」を強くもつようになったことを挙げ(資料8)、交流への満足度は3学年で最も高かった。

(オ) 新入生説明会(11月) 1年生全生徒 小学校6年生

中学生と直接交流することで、小学校6年生の中学校生活への不安の軽減を図ること、中学校生活では常に下級生の立場になってしまう1年生が、これまでの異学年交流を生かして、人の役に立つ体験をすることにより、「自己有用感」を獲得し、よき上級生になる自覚を高めることをねらいとして、1年生が中学校生活について紹介した(資料9)。中学校生活に関する事前アンケートでは、小学生(2校計240人)の59.3%が、中学校生活に何らかの不安を感じていた。しかし交流後は、説明を受けた小学生の91.2%が「不安が軽減した」と回答した。また80.2%の小学生が、「なりたい中学生のイメージをもった」と回答し、その具体像としては、交流した「今の中学校1年生」が挙げられた。

1年生にとっては、非常に満足度の高い活動となった(資料10)。

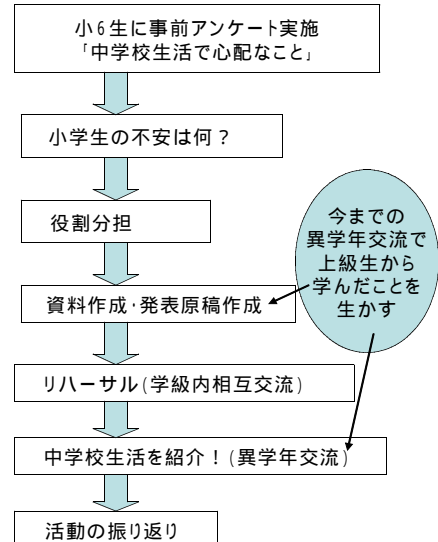
【資料7】縦割り種目実施がよかった理由

- <1年生>
 - ・2年生になったら、1年生の役に立ちたいと思った。
 - ・上級生の姿から「頑張れる体育祭なんだ」と学び、「こんなに頑張れるんだ」と自信がついた。
 - ・新しく入ってくる1年生に熱意を伝えたい。
 - ・3年生みたいになりたいと思った。
- <2年生>
 - ・来年1・2年生をリードしたい。
 - ・3年生になったとき、1・2年生に何かを伝えたいと思った。
 - ・3年生が話をちゃんと聞いてくれた。
- <3年生>
 - ・学年が違う人と協力することは、自分の成長に必要。
 - ・2・3年生は、上級生として成長できる。
 - ・自分たちの手で、学校をつくっていると感じた。

【資料8】他学年との交流がよかった理由

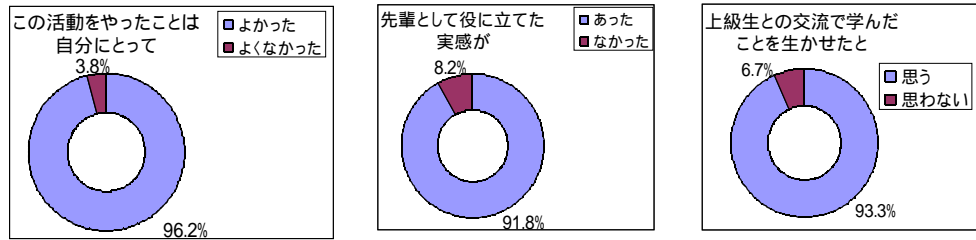
- <1年生>
 - ・自分たちのできないことを、上級生が歌で教えてくれていると感じた。
 - ・上級生の歌から「こんなに感動するのか」と思った。
 - ・上級生から「頑張れ!」と言われ、勇気づけられた。
 - ・本番を体験している上級生からの言葉は、今後の目標になった。
 - ・上級生の前で歌ったことで、緊張に慣れ、自信になった。
- <2年生>
 - ・3年生の合唱を聴いて、「もっとがんばらな」と「自分たちもうまくなりな」という気持ちになった。
 - ・1年生にとって、自分たちは先輩だから、格好悪いところを見せたくないいいところを見せたい、だから、必死になれる。
 - ・1年生に褒められたことが自信になった。
- <3年生>
 - ・下級生に情けないところは見せられないと感じた。
 - ・下級生に「すごい」と言われたことが自信になった。
 - ・成長した自分たちを実感できた。
 - ・下級生の合唱に、自分たちが忘れていたもの(元気・気持ちを込める・真剣さ)を教えられた。
 - ・自分たちが、格好ばかりをつけ過ぎていたことがわかった。

【資料9】活動の流れ



中学校生活に関する事前アンケートでは、小学生(2校計240人)の59.3%が、中学校生活に何らかの不安を感じていた。しかし交流後は、説明を受けた小学生の91.2%が「不安が軽減した」と回答した。また80.2%の小学生が、「なりたい中学生のイメージをもった」と回答し、その具体像としては、交流した「今の中学校1年生」が挙げられた。

【資料10- 】新入生説明会後のアンケート（中学校1年生）



また、活動の振り返りの記述には「この活動にやる気をもって取り組めなかったので、先輩として役に立たなかった実感が無い。でも、やる気がないという自分の悪いところに気付いてよかった。」「私たちの班の男子がふざけていたので小学生がひいていた。先輩としてこんな態度はいけなくて強く思った。」など、自分たちの活動への意欲や取組の姿勢に対する真摯な反省が書かれていた。さらにこれまでの上級生との交流で学んだ、「下級生に対するやさしく、温かい雰囲気」「レポートや資料のまとめ方」「真剣に一生懸命発表すること」「発表の仕方」「自信」「自分の考えや思いを伝えること」などを、実際の活動で生かすことができたことと回答していた。

【資料10- 】満足感を得られた理由

- 1 **自分たちの活動への満足感**
 - ・小学生をリードできた
 - ・工夫して説明ができた
 - ・よい学校づくりに貢献できた
 - ・先輩としての心構えができた
- 2 **相手の様子から得られた満足感**
 - ・真剣に話を聞いてくれた
 - ・初めは不安そうだった小学生が、笑顔で帰っていった
 - ・小学生が、うなずいたり、笑ったりして話を聞いてくれた

2・3年生の学級担任は、1年生の活躍や上級生からの学びを生かした取組ができたことを生徒に伝え、異学年交流により学校文化が形成されていくことのすばらしさについて説明した。

イ 人間関係づくりプログラム（領域1）の日常的な実施

年間を通じて、最低月1回程度の割合で、学級担任を中心に、全学級で実施することを目指した。全校で共通の時間を設定して実施することは難しいため、時と場を限定せず、だれでも実施可能な「人間関係づくりプログラム」を12例紹介（資料11）し、積極的に取り組めるようにした。また、「日本のピア・サポート・プログラム」領域1のトレーニングを再構成し、道徳の時間の活用を提案（資料12）するとともに、8月の校内研修会で演習を行った。その結果、全校体制での取組が意識され、11月末現在、92.0%の教師が何らかの形で実施し（資料13）、3年生の教師の実施率は100%であった。生徒は、この活動を通し、協力すること、自分の思いを表現することや他人の意見を聞くことの大切さを感じ取っていた（資料14）。

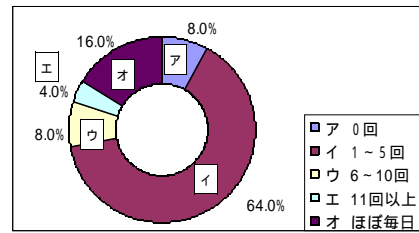
【資料11】「人間関係づくりプログラム」の一例

プログラム名	方法・手順	こんな時に
①一列に並ぶ ○準備は時になし ○一列に並ぶ基準がポイント 集団の状況に合わせて、ちょっとだけ真向かふようにする 〈例〉生年月日順、身長順、「名前」のアイウエオ順（同じ名前なら名前で前後を決める）など	①一人が指示者（教師でよい）となって、何を基準に一列に並ぶかを発表する ②一人一人は言葉をしないで、黙ったままお互いにアイコンタクトを取り、自分の位置を確認しながら並ぶ ※下級部：集団の特性によって、並しながら並ぶこともOK（お互いがよく知らない）異学年交流や集団のスタート時は並しながらの方がいい	・基準を工夫すれば、いつでもOK
②ペアの相手は？ ○ペアになる言葉を書いた紙を準備する 〈例〉けいけい、春夏秋冬、針と糸、ご飯とおみそ汁、大中小、東西南北、海と山、定と否、七と紅茶、汗と汗拭き、ハチと鉛筆、ハチとカマド、上と下、靴と靴下、赤青（緑）黄、ハチとトナリ （別紙を活用） ○紙を背中につけるときは、教室の壁面（窓面・ホワイトボード）を向かせ、目隠しさせるとよい	①ペアになる言葉を書いた紙を準備する ※必ずしもペアでなくても、グループになる言葉でもいい（人数に合わせて） ②参加者には見せないように、紙を背中に貼る ③全員が動き回り、お互いの背中の言葉についてヒントを出し合う ※ヒントを出すときのヒントとして伝えること a 簡単に分かるヒントだと自分だけ取り残されるかも… b 相手は分からないと、永久にペアを見つけれないかも… 「じゃあ、どうすればいいか？」を考えよう ④自分の背中の言葉が分かったら、ペアになる言葉を背中に貼った人を見つけ、見つけたら座る ⑤全員がペアになれば、自分の背中に貼られた言葉やどんなヒントで分かったかを発表する	・いつでもOK 

なお、紙面の関係で詳述はできないが、「人間関係づくりプログラム」の実施頻度

と異学年交流の成果の関連性については、月1回程度の割合での実施が、学級の雰囲気づくりにつながり、異学年交流の成果を高めるという調査結果を得た。

【資料13】人間関係づくりプログラム実施回数（教師）



【資料12】道徳の時間を利用した人間関係づくりプログラム

段階	トレーニング内容	活動内容(該当学年)	道徳の該当内容項目
1	自己理解	・エゴグラム(全学年)	(5) 個性の伸長
2	協力するために	・ブラインドワーク ・トラストワーク ・ペアの相手は?(全学年) ・四角形(全学年) ・私たちのお店屋さん(全学年) ・パンガロー殺人事件(3年生)	(1) 集団生活の向上 (4) 公正・公平
3	聞き方・伝え方	・一文表現(全学年) ・私の話を聞いて ～拒否と受容のロールプレイ～ ・背中合わせと向かい合わせの伝達	(1) 礼儀
4	問題の解決 (価値の順位付け)	・漂流脱出テスト ・SOS～砂漠でサバイバル～ ・月世界(月からの脱出) ・あなたならどうする?	(5) 他に学ぶ広い心 謙虚・寛容 (1) 自然愛・畏敬の念

【資料14】活動後の振り返り（1年生）

人間関係づくりプログラム「協力するために」活動後の振り返り
 ・一人だとなかなか大変なことが、みんなで協力するとすぐできてしまうので、協力することはすごいと思った。
 ・ふだんしゃべったことのない子としゃべれたし、人に意見を出せるようになった。これからは人に自分の意見を言えたいし、みんなの言っていることをよく聴いて、理解するのはとても大変だけど、みんなと協力してやることでできてとてもよかった。
 ・自分の意見ばかり言っている人、自分の意見を言わない人がいた。途中から一人一人の意見を聴くことにしていって協力できた。

ウ 異学年交流の継続による生徒の変化についての調査（11月）

生徒が「異学年交流を通して具体的に付いたと実感できる力」について調査した。

「異学年交流が自分の成長にプラスになったと思う」生徒は、1年生97.3% 2年生91.6% 3年生96.1%、「これからも異学年・異年齢の人との交流を続けたい」生徒は、1年生95.6% 2年生88.3% 3年生93.5%で、それぞれの理由を、生徒は資料15・16のように回答した。いずれも2年生の数値が低かったが、その理由は5(2)で考察する。

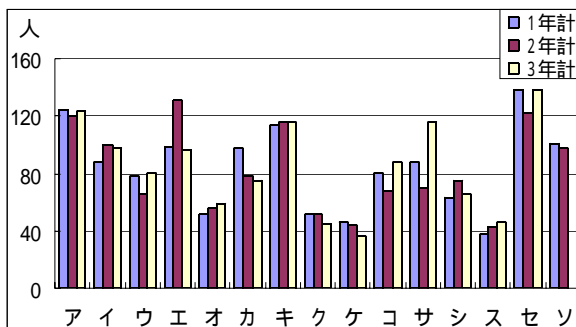
【資料15】異学年交流が自分の成長にプラスになったと感じる理由

【資料16】これからも異学年・異年齢交流を続けたい理由

<1年生>
 ・異学年交流のおかげで、先輩に対する不安がなくなった。
 ・上級生の姿を見て、責任感が強くなった。
 <2年生>
 ・すごい自信がついた。他の学年の人と感じ方が違うが、お互いに意見をしっかりと言えるようになった。
 ・もっと相手や自分について知りたいと思うようになった。
 ・下級生の手本になれるように、自分の行動に気を付けるようになった。
 <3年生>
 ・自信を付けたり、自分の成長につながったりする。
 ・上級生は下級生にアドバイスでき、下級生は上級生を誇りに思っ仲良くなる。
 ・下級生に教えることで、自分の理解も深まった。
 ・人とふれ合うことが楽しくなる。
 ・自分の力や自分のよさが分かり、自分の成長につながる。

<1年生>
 ・学校の伝統として残したい。
 ・続けていけば、人前で話すことが得意になると思う。
 ・人に優しく接することをやっていると、自分の成長につながる。
 <2年生>
 ・学校全体に活気が出て、良い学校になる。
 ・他学年の人でも差別なく、どの学年の人ともよりよい関係を築ける。
 <3年生>
 ・続けることで、自分も相手も成長する。
 ・いろいろな考え方ができる。考え方が広がる。
 ・社会で生きていく上で、大切なことを学べる。
 ・人の役に立つ活動は、自分のためになる活動だと思う。
 ・下級生からも学ぶことはたくさんある。
 ・学校全体が明るく活気に満ち、学校が悪い方向へ向かわない。

【資料17】異学年交流を行い、よかったこと（生徒）<ア～ソから該当すると思う項目をすべて選択>



ア:他学年の生徒と、よりよい関係を築こうと思うようになった
 イ:責任感が強くなった 目標に向かって努力しようと思うようになった
 ウ:自分の思いを伝えようとする気持ちが高まった
 エ:人の話、考えや意見を聴くことができるようになった
 オ:自分の考えや感じ方、行動に自信がもてるようになった
 カ:嬉しい気持ちや感謝を素直に伝えたり、謝罪したりできるようになった
 キ:クラスや部内の人間関係がよくなった
 ク:担任以外の学年の先生から声を掛けられたり、ほめられたりするようになった
 ケ:自分の学年以外の先生から声を掛けられたり、ほめられたりするようになった
 コ:人の役に立てたと実感できた
 サ:この学校の生徒としての誇りが高まった
 シ:自分のことを考えたり、自分について振り返ったりする機会が増えた
 ス:自分の長所や自分のよさに、気付くことができるようになった
 セ:下級生の手本になろうと思うようになった
 ソ:理想の上級生像がイメージできるようになった

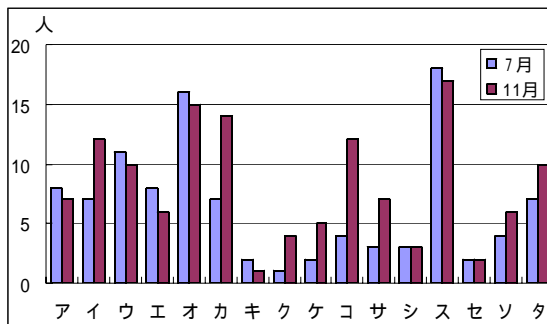
注) 2・3年生は合唱コンクール後、1年生は新入生説明会后(いずれも11月)に実施のアンケートから作成。

異学年交流を行いよかったことで全学年に共通する点は、「他学年とのよりよい関係の構築」「クラスや部内の人間関係の向上」「下級生の手本になろうと思ったこと」であった。3年生は「学校に対する誇りが高まった」と回答した生徒が他学年に比べて大変多かった。また、「上級生としての自覚が高まったことが、自分自身の成長、責任感や努力の向上につながった」「新しい自分を見付けるチャンス」「自分の悪いところが分かる」「自分がどう見られているか知ることができた」などと記述した、他者とのかわりを通して自分を見つめる意識をもてた生徒も多かった。2年生は「人の話、考えや意見を聴くことができるようになった」と回答した生徒の割合が高かった（1年生53.8% 2年生60.9% 3年生48.0%）。1年生の75.5%の生徒は、上級生になったときの自分をイメージでき、また、「感謝や謝罪の気持ちが素直に伝えられるようになった」と回答した生徒は他学年より多かった（資料17）。異年齢他者とのかわりが自己の成長につながることを、学年に関係なく、生徒自身が実感していた。

各学年とも「自分の言動に対する自信」「自分の長所への気付き」を回答した生徒は30%以下だったが、異学年交流が自分の成長にプラスになったと感じる理由に「自信が付いた」「自分のよさが分かった」などの記述があった（資料15）ことから、異学年交流の継続により、自尊感情や自己肯定感が高まる可能性が考えられると感じた。

エ 教師の異学年交流に対する意識の変化についての調査（7月・11月）

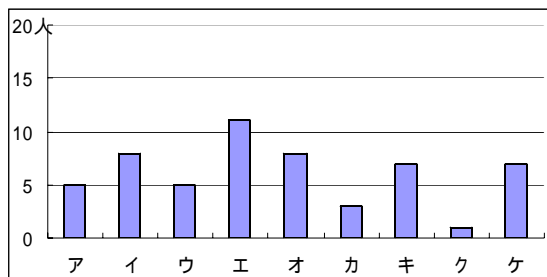
【資料18】異学年交流の成果（教師）



注) 7月は実施前、期待する成果
11月は実施後、感じた成果

- ア: 生徒の良質な人間関係が広がる
- イ: 生徒が責任感をもつようになり、目標に向かって努力したりするようになる
- ウ: 生徒の表現力や話を聴く態度が向上する
- エ: 生徒が自分の考えに自信をもつようになる 自分の考えを自信をもって伝えるようになる
- オ: 上級生が下級生の手本になろうとする
- カ: 下級生が良質なロールモデル(理想の上級生像)をもつようになる
- キ: 教室内や休み時間などにおける、生徒の些細な問題が減少する
- ク: 学級内や部内の生徒の人間関係が向上する
- ケ: 他学年の教師との人間関係が向上する
- コ: 学級担任や学年の教師では気付かなかった生徒のよさを指摘してもらえる
- サ: 教師が生徒のよさをこれまでよりもみとめられるようになる
- シ: 授業に行っていない学級、学年の生徒にも声を掛けられるようになる
- ス: 上級学年から下級学年へ学校文化(伝統)が継承される
- セ: 生徒の自立的な価値観や道徳観が形成される
- ソ: 生徒の自己肯定感や自尊感情が高まる
- タ: 生徒の社会性が高まる

【資料19】異学年交流による意識の変化（教師）



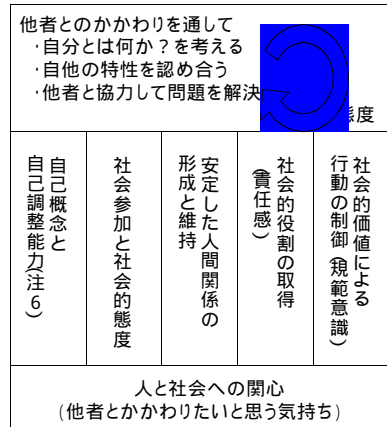
- ア: 人間関係づくりプログラムの今まで以上の実践
- イ: 自分の学級・学年の生徒への今まで以上の声掛け
- ウ: 他学年や授業に行っていない学級の生徒への今まで以上の声掛け
- エ: 自分の学級・学年の生徒のよさへの今まで以上の気付き
- オ: 他学年や授業に行っていない学級の生徒のよさへの今まで以上の気付き
- カ: 学年の教師との会話の増加
- キ: 他学年の教師との会話の増加
- ク: 本校の職員としての誇りの高まり
- ケ: 自分の学級経営や生徒への接し方を振り返る機会の増加

教師は異学年交流に、「下級生の手本になろうとする上級生」「学校文化の継承」を期待しており、交流後の成果でも、この2点を感じていた。「生徒が自分の考えに自信をもつ」ことについては、期待したほどの成果は得られなかったが、「生徒の責任感の向上」「下級生による理想の上級生像の獲得」「教師が生徒のよさに気付き、

認めること」などは、実施前の期待以上に成果を感じていた（資料18）。12月の学校評価でも93.9%の教師（学級担任は100%）が、「異学年交流の実施が生徒にプラスになった」と回答した。また、教師の意識の変化としては、生徒のよさに気付くようになっただけでなく「他学年の教師との会話」や「自分の学級経営や生徒への接し方を振り返る機会」が増えたと感じており（資料19）、異学年交流に対して「活動の積み重ねにより、生徒の自立的な運営が可能になる」「交流活動を通して学んだことや得たものを、必ず個や学級・学年に返すことを大切にしたい」「いつまでも異学年交流ができる学校でありたい」などの感想も挙げられた。実施前、異学年交流に最も期待していたのは1年生の教師であったが、実施後、最も交流活動の成果を感じたのは3年生の教師であった。年長生徒の成長に焦点を当てた交流の結果だと思われる。

なお今後の課題として、年間指導計画の見直し
活動時間の確保 事前・事後指導の徹底 生徒への個別指導・個別支援の在り方 「個対個」の交流の必要性 生徒の発想を生かした異学年交流の可能性 担当者、事前連絡、調整の必要性が挙げられた。

【資料20】社会性のとらえ



注) 福島脩美編集『社会性についての相談』, ぎょうせい, 1993年, 186-196ページを基に筆者が作成。

【資料21】社会性に関する質問の平均点の変化

質問内容	6月	10月
1.できるだけ宿題をやっている	3.85	4.00
2.なるべく提出物を遅れないで出している	3.95	4.05
3.得意な教科・好きな教科がある	4.20	4.28
4.だれかと勉強を教え合うことがある	3.42	3.68
5.学習に関する忘れ物は、ない	3.70	3.74
6.予定や日記をしっかりと書いている	3.59	3.39
7.机や机など、大切に使うようにしている	3.83	3.79
8.将来やってみたいことやなりた職業がある	3.93	3.96
9.自分のクラスは仲のいいクラスだと思う	3.94	4.03
10.クラスはまとまっていると思う	3.59	3.58
11.別のクラスではなく、今のクラスにいたいと思う	3.52	3.86
12.自分はクラスの中で存在感があると思う	2.98	3.00
13.クラスに嫌だ、気が合わないと思う人はまったくない	2.94	3.08
14.担任の先生とうまくいっていると思う	3.61	3.76
15.昼休みなど、一人ではなく、いつも何人かという	4.15	4.24
16.グループや班を作るとき、自分だけ余ってしまうことはない	4.22	4.28
17.自分が言った意見がクラスや部活で賛成してもらえる	3.26	3.29
18.学校に来れば楽しいことがある	3.67	3.91
19.学校生活全体を楽しく過ごしている	3.58	3.85
20.クラスで何かやるときは、進んでやる方である	3.02	3.12
21.学校のきまりは、やっぱり守るべきだ	3.96	3.88
22.先生たちから、自分は関心をもたれたり期待されたりしていると思う	2.75	2.80
23.先生たちの前でも、自分らしくふるまっている	3.65	3.62
24.自分の学校に対して「誇り」をもっている	3.65	3.75
25.人にどう思われているかは、気にならない	2.81	3.00
26.かげで自分の悪口を言われていることはないと思う	2.93	3.00
27.一緒にいると楽しい友達、仲間がいる	4.46	4.56
28.いつも一緒にいる仲間以外にも、仲良くできそうな子がいる	3.72	3.66
29.困った時に話を聞いてくれる友達、仲間がいる	4.08	4.17
30.けんかや悪口、無視などがあるかもしれないが、それでも仲良くやっているとと思う	3.66	3.62

注) 表中の番号 ~ は、【資料20】「社会性のとらえ」の図中 ~ に相当する。網掛けしてある部分は、平均点が下降した質問。

(3) 「ほのぼの度アンケート」(注5)に見る生徒の社会性の発達についての考察(6月・10月)

在籍校では、学校生活の満足度を調査する「ほのぼの度アンケート」を年2回実施している。学年別・質問別の平均点(5点満点)を算出するとともに、資料20の視点を基に社会性に関する30の質問を抽出(資料21)し、6月実施のアンケート結果から生徒の社会性について分析した。1~3年生に共通する特徴として、次のような点が指摘できた。一緒にいる友達や仲間の存在という安心感があり、得意な教科や好きな教科もある。規範意識は比較的高く、将来への見通しもあるが、反面、学級における自己存在感が低く、教師からの関心や期待も低いと感じ、積極性に欠ける。気の合わない人の存在や周囲の目が気になっている。

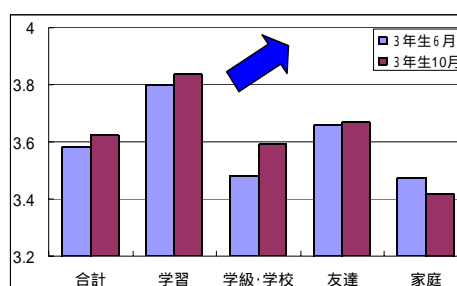
年長生徒の成長に焦点を当てた異学年交流という視点から、3年生の6月と10月のアンケート結果を比較し、変化を確認した。

学習、学級・学校に関する項目と合計の平均点が上昇（資料22）。前年度同時期の3年生と比べても、学級・学校に関する項目の平均点は大きく上回る（資料23）。

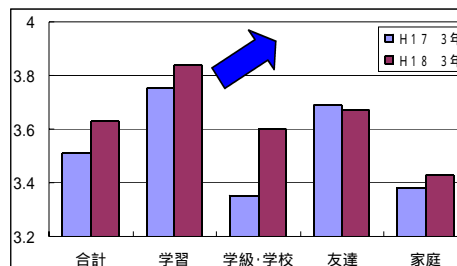
社会性に関する質問のうち平均点3点未満の質問が減少（6月：5 10月：1）。また、社会性に関する30の質問のうち23の質問の平均点が上昇（資料21）。

これらの変化から、6月には、学級における自己存在感が低く、積極性に欠け、周囲の目を気にする傾向にあった3年生が、10月には、上級生としての自覚、集団への所属感や所属集団に対する誇りを高め、そこに積極的にかかわろうとするようになったことを指摘でき、社会性が発達したと考えられる。

【資料22】3年生6月と10月との比較



【資料23】H17年度3年生との比較



5 研究のまとめ

異学年交流は子供の社会性を育てるために、確かに価値のある活動だと実感した。年齢相応の社会性を身に付けた中学生は、落ち着いた学校生活を送ることができるとも感じた。

(1) 3年生

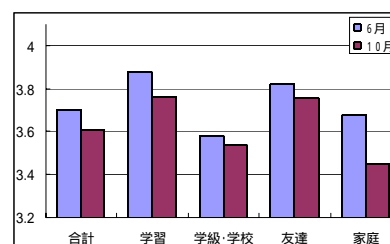
「年長生徒の自己有用感の獲得と社会性の向上」という本研究のねらいに基づき、3年生の変化に注目すると、次のようなことが確認できた。修学旅行発表会では、交流相手である下級生の態度や反応、感想などから「役に立てた」実感を獲得したり、自分の経験が他人の役に立つ喜びや人に何かを伝える楽しさを味わったりした。体育祭を経て、合唱コンクール合同練習になると、下級生の言動や態度、評価を基に自分自身や自分の所属集団を見つめる姿勢が育ってきた。下級生から「認められ、頼りにされた」ことで、「自己有用感」を獲得した3年生は、異学年交流の積み重ねにより、安定した人間関係を形成し、自分の所属集団への誇りを高めるとともに、自己概念を形成し、自分の言動に少しずつ自信をもつようになった。そしてさらに、自分の将来に対する明確な見通しをもち、「もっと人とかかわりたい」という思いも抱くようになったと言える。

(2) 1・2年生

上級生の立場での交流に大きな意味があることを2年生のアンケート結果が示した。

一般に中学校2年生の2学期は、問題行動の多い、不安定な時期と言われる。「ほのぼの度アンケート」2年生10月の平均点は、6月に比べて全項目で下降

【資料24】ほのぼの度アンケート
2年生6月と10月の比較



した(資料24)。体育祭や異学年交流を振り返るアンケートでも、2年生の満足度や意欲は、1・3年生に比べて低かった。上級生であり、下級生でもあるという中途半端な立場も関係していよう。そうした中、明らかに上級生の立場で交流する場面のあった合唱コンクール合同練習への満足度が、3学年で最も高かった(1年生97.8% 2年生98.6% 3年生95.5%)ことは、大変興味深い。不安定な時期だからこそ、「自分たちが上級生として活躍できた」と実感できる経験が大切であると言える。

上級生との活動を通して、下級生は「理想の上級生像」を獲得し、中学校3年間の自分の姿に見通しをもった。1年生はアンケートに、「自分は先輩になれないかも、と思っていたが、異学年交流を通して、先輩になれるように頑張ろうと思うようになった」「先輩・後輩の関係はいいものだと、みんなに実感して欲しい」と記述していた。

(3) 教師のかかわりの重要性

『伝える側を無視した聞く態度』はあってはならないことを、十分生徒に伝えていかなければならない。そうしないと、成果がある交流ができないことに気付いた。」とは、教師アンケートの指摘である。教師の事前・事後の指導が、異学年交流の成果を決めることは、生徒アンケートも示している。毎回の異学年交流後のアンケートを学級ごとに分析すると、事前に学級担任が交流の目的をどう話したかが見えてくる。例えば、修学旅行発表会後のアンケートに、多くの生徒が「この交流を総合学習のレポート作成に生かしたい」と書いた1年生の学級があった。3年生の発表を聞く際の視点を事前に学級担任が指導したことがうかがえた。また交流後、上級生は、失敗に終わったと感じる交流を反省し、次にどうすればいいかを考えていること、下級生は、上級生の年長者らしくない言動の適否を考えていることも生徒アンケートから分かった。こうした生徒の思いをくみ取り、交流後に教師が、生徒の努力や気付きを具体的に認め、褒め、励ますことは、異学年交流の成果を高めることにつながる。生徒に不適切な言動があれば、当然指導する必要がある。すなわち、異学年交流を行うことが、何らかの成果に直結するのではなく、異学年交流を通じて、教師が生徒一人一人や集団、交流の実情に応じた支援、事前・事後指導をすることで、初めて成果のある異学年交流ができると言える。

(4) 基盤となる学級集団づくりの重要性

成果のある異学年交流を行うためには、「学級づくり」も重要である。「ほのぼの度アンケート」で、学級・学校生活の満足度が高い3年生の学級と交流した1・2年生の異学年交流に対する満足度は高かった。学級・学校生活の満足度が低い1・2年生の学級は、「理想の上級生像がイメージできる」「これからも異学年・異年齢交流を続けたい」と答える生徒の割合が低かった。いずれも2年生で、その傾向が特に顕著であった。

「充実した異学年交流ができるかどうか」「生徒が異学年・異年齢交流を継続したいと思うかどうか」の鍵は、学級の雰囲気や握っており、学級・学校生活への満足度が低いと、人とかかわりたいと思う気持ちや社会性は育ちにくいと考えられる。

(5) 意図的・計画的な異学年交流の継続の意味

異学年交流は、子供の社会性を育てるための万能薬や特効薬ではない。行事で異学年

交流を行うことに意味があるのではなく、各行事を「異学年交流」というパイプでつなぐことで、既存の教育活動（行事）を生かして、子供の社会性の発達という成果をあげることができると思う。様々な役割が求められ、学校が益々多忙化している今、起きている問題を解決するためには、新しいことに取り組むのではなく、既存の活動を生かすという視点が必要だと感じる。「日本のピア・サポート・プログラム」は、最低でも1年間、できれば中学校3年間、実践を積み重ねた上で成果を論ずる必要があるとされる。異学年交流の中で、3学年とも満足度が高かった合唱コンクール合同練習には、学校としての7年間の取組という積み重ねがある。1年間の中で複数回、異学年交流を積み重ねることにも大きな意味があることを3年生の変化が示した。新入生説明会後の1年生には、自己概念の形成が見られたことから、上級生との交流の経験の上に、人の役に立つ経験を積み重ねる意味も大きいと感じる。教師が見通しとねらいをもって、学校体制で継続することが、社会性の育成につながる価値ある異学年交流になると考える。

注

- 1) 「社会性のある子どもとは、人と社会に積極的な関心を持ち、期待される社会的行動様式をよく身につけていて、他の子どもや大人と好ましい関係を築くことができ、仲間といっしょに行動し、自分の意見を効果的に表現して相手に効果的に影響し、積極的に役割をとって集団行動に参加できる」福島脩美編集『社会性についての相談』、ぎょうせい、1993年、188ページ。
- 2) 滝充編著『改訂新版 ピア・サポートではじめる学校づくり 中学校編』、金子書房、2004年、10 41ページ。
- 3) 予防的とは、生徒指導上の諸問題が起きる前に、問題の発生を未然に防ぐため、広く一般を対象に働き掛けを行っておく考え方。教育的とは、生徒自身の問題を生徒自身が自覚し、自ら対処する意欲をもつことにより生徒指導上の課題が解決に向かうという考え方。滝充「生徒指導の理念と方法を考える 生徒指導モデルと事後治療的・予防治療的・予防教育的アプローチ」『生徒指導研究』創刊号、2002年。
- 4) 自己有用感とは、他者と交流することで得られる「自分は役に立った」「自分は頼りにされている」「みんなから認められている」という、他者の存在や他者との関係を前提として、自分や自分の行動が価値あるものと受け止められる感覚。
- 5) 学校生活の満足度を調査する目的で、全校生徒を対象に、毎年6月と10月に実施し、結果を生徒理解や教育相談に役立てる。生徒は50の質問に5段階（5：とても満足～1：ほとんど満足でない）で回答する。50の質問の内容は、学習に関すること、学級・学校生活に関すること、友達関係、家庭生活の4項目に分類されている。
- 6) 自己概念は、自己観察や人の言動、態度、評価などを通して形成される「自分は什么样的人なのか」という概念。自己調整能力は、自分で目標を決め、その目標に向けて自分の思いや感情、行為を自分でコントロールする能力。根気や我慢、自己反省、他人との関係を調整する能力などを指す。周囲から認められることで、安定したり、活性化したりするとされる。前掲1)、186 188ページ、195 197ページ。

